

「思い出すこと、いくつか」

樋野芳雄

定年退職を迎えるに当たって、愛知大学で過ごした歳月の思い出を書くという機会をいただきました。愛知大学に勤務するようになって、なんと、41年になんなんとしています。思い出すことは数々ありますが、ここでは、愛知大学での一大学構成員としての経験をわずかながら書き留めさせていただこうと思います。

〈着任早々〉

1979年4月に愛知大学に着任して、すぐの教授会で議題に上がったのは、短期大学部法経科2部を廃止し2学年分の定員400人を返上するという問題でした。事情がよく分からないのに、いきなり重要な判断の場に立たされたようで、面食らいました。各教授会に諮られていたはずですが、特に大きな反対はなかったようです。後から聞いたところによると、1975年に、文部省の政策変更に伴って各大学に定員増が認められる可能性が生まれ、あちこちの大学が「駆け込み定員増」に走ったのに、本学は申請しなかったということです。それに続く「定員返上」ですから、当時の愛知大学はなんとも鷹揚なものでした。

もうひとつ、より長期にわたって問題となったのが、三好校地の取得と利用をめぐる問題です。わたしたち新任者も、たちまちその渦中に巻き込まれることになりました。その年のうちに、土地購入の手続きは終わりましたが、その土地をどう使うのか、どの学部が三好校地に移転するのが問題となり、こちらの方が難題で、決定までに数年を要しました。

実質的には、当時の法経学部教授会で進められていた議論が、方向を決するものでした。法経学部の3学部への改組、法学部、経済学部、経営学部への編成替えが、同時に課題になっていたからです。学内では、法経分離（問題）と呼ばれていました。三好校地利用問題は、これら分離した新学部を各校地にどう配置するかという問題でもあったのです。結局、法経学部分離後の法学部と経営学部が三好校地に行くということになりました。

1988年4月の三好新キャンパス開設が近づいてくると、さまざまな実務的な問題を片

付けなければならなくなってきました。そのひとつが、授業の開始時刻を何時にするかという問題でした。このときの決定が、現在の授業時間帯の設定にも影響を及ぼしています。

三好校地が開学すると、学生のかかなりの部分は、接続する地下鉄・名鉄を利用して通ってくると思われました。従来通りの9時始まりだと、ちょうど名古屋都心部伏見辺りのラッシュ時にぶつかることとなります。それは避けた方がいいのではないかと、というのが検討のポイントでした。わたしはその頃、教務委員を務めていました。名古屋（車道）の教務課員が出向いて観察してみると、伏見周辺のラッシュは20分ほど経つと大分緩和されることが分かりました。そこで、三好校地は9時20分開始がよかろうということになります。豊橋校舎は従来通り、9時開始のままでいいという意見も出ました。しかし、教務課からは、両校地の時間帯が別々だと、所属校地でない方に出講する際、先生方がうっかり間違えることはありうるという（実績に基づく？）指摘がありました。教員側からも、電話による教員同士の校地間の連絡のためには、休み時間は一緒の方がいいとの意見が出ます。当時は、まだ電話による連絡の時代です。結局、豊橋も時間帯を合わせることになり、全校地で9時20分始まりにするということになりました。今日では、名古屋（笹島）校舎が9時始まり、豊橋校舎が9時20分始まりとなっていて、言わば逆転しています。それが自然だと受け止められていますから、両校地をめぐる事情が大きく変わったということでしょう。

三好校地での授業が始まると、科目ごとの教員配置事情によっては、複数校地にわたる掛け持ち出講が必要になりました。わたし自身は、それまでに基本勤務地としての豊橋での授業担当に加えて、車道校舎での昼夜の授業も担当していました。車道での昼間の授業がなくなった代わりに、ひとコマでしたが三好へも授業に出向くことになり、その足で車道の夜間の授業に回りました。

〈1992年、18歳人口が約205万人のピークに。定員増問題〉

2020年現在116万人余となっている18歳人口は、1970年代半ば以降ほぼ年々増加し、1992年には、205万人のピークを迎えることになっていました。当然、大学進学希望者も急増することが想定されるため、私立大学に期間付定員増（臨時定員増）を認めてこれを乗り切るとというのが、国（文部省）の方針でした。しかも、それを受け入れた私立大学には、臨時定員増の2分の1が恒常定員として認められるだろうという見込みが出てきましたから、1980年代半ばから日本の各私立大学はこの「好期」をどう生かすか、対応に走り回ることになりました。かつての「駆け込み定員増」を逃した愛知大学にとっても、今度は逃すわけにはいかない機会でした。結果としては、87年度から法経学部第1部（昼間部）と文学部で420名の期間付定員増が認められ（93年に期間延長）、さらに91年度からは

法経分離後の法学部（1部）・経済学部（1部）・経営学部、そして文学部の期間付定員増270名が認められました。

これより前、学内で、文教政策・大学政策の動向を学び、これからの愛知大学の進むべき方向を考えていくための勉強会を持つという呼びかけがなされました。当時は、今日と比べてまだ高等教育政策に関する情報が少なく、その入手のためには一定の手間暇をかける必要がありました。基本的な情報をしっかり踏まえて、高等教育政策の動向を見極め、愛知大学の対応の仕方を考えていこうという勉強会（大学問題研究会）でした。

発足に当たっての熱心なメンバーは、渡辺正さん、市野和夫さん、黒柳孝夫さん、短大事務長の 大野一石さんといった方々でした。お誘いを受けてわたしも加えていただき、共通の勉強材料の報告もしました。OECD 教育調査団が日本の教育政策について調査をした報告書を取り上げたことを覚えています。OECD 加盟各国の文教政策担当者の間では、日本の文部省はさほど大きくない額の補助金を出すことで、全国の私立大学を上手くコントロール下に置いたという評判になっている（と日本の文部官僚が意識している）ということを知ったのも、この報告書の訳書を通じてでした。

〈新学部設置論〉

学内では、法経学部分離とは別に新学部創設の動きがあって、この動きは錯綜した経過をたどっていきます。教養部内には新学部設置推進論があり、わたしの着任前後から何度かの将来構想が出されていました。しかし、ある構想が出されても一向に進捗は見られず、その時々状況に応じて名称や構成の違うものが出されたり、担い手が代わったりしていました。当時の入学定員 980 人ではやっていけないという主張が、新学部創設論のひとつの根拠ともされていました。やがて、90 年代になって文部省の主導により全国の大学で教養部廃止の動きが高まり、愛知大学もその方向で進むことになりました。その後の再編を実際にどうするかで、またさまざまな議論と動きが繰り返されることになります。

後に、国際コミュニケーション学部が発足してから、やはり新学部設置問題に取り組んでいるという、東京のある大学の先生が、新学部発足にこぎ着けた愛知大学の経験を聞かせてほしいとして来学されました。ひとわり経過をお話すると、自分の大学でも同じ名称の構想がいくつも出ては消えることが続いていると言われていました。問題状況と対処案は、あちこちの大学で共通していたということでしょう。

新学部設置論にはもうひとつの流れがありました。愛知大学の中国研究の歴史を生かしてその系統の学部をつくってはというものです。これもまた、愛知大学の歴史の中で考え方の分かれる問題でした。一方には、愛知大学における中国研究の蓄積を生かして中国研究に集中する単一の学部をつくるのがいいという考えがあり、他方には専門を異にするそ

それぞれの学部が中国研究を含んでいることこそが愛知大学の特長をなすのだという考え方がありました。各々に強く主張する方々でしたが、結局、前者の立場が優勢となり、名古屋校地（三好校地）に法学部・経営学部の他にもうひとつ学部を配置することが必要だという議論も加わって、1997年4月の現代中国学部開設に至ります。

〈国際交流委員会の仕事と上げ潮ムードの創立 50 周年記念事業〉

わたし自身は、90年代に入って、学内業務のうえで国際交流委員会の仕事を担当するようになりました。日本の各大学でも、1980年代から90年代は「国際化」に力を入れ出した時期でした。名称に「国際」を冠した新学部や学科があちこちの大学で開設されましたし、海外の大学との国際交流を掲げた活動も盛んになりました。1979年に最初の中国訪問団を送った愛知大学にとっても、80年代から90年代は国際交流を拡大する時期に当たっていました。ご縁のあった海外の大学と次々と協定を結び、交流事業を実現していくこととなります。

1992年には、イギリス・レディング大学の春のセミナーの引率を担当しました。前半は三好正弘さん、後半はわたしという分担です。このときは、54人という多くの学生諸君の参加を得ました。2人の滞在が重なっている期間に、外相やNATO事務総長を務めたキャリントン卿のレディング大学学長就任式があり、わたしたち2人も招かれました。また、わたしは不在でしたが、セミナー期間中に同大学の生物学系研究所の開所式があり、エリザベス女王が出席されました。学生たちも、遠目ながらも女王の姿に接することができたそうです。

1993年からは米国サウスイースト・ミズーリ大学とも交流が始まり、わたしは国際交流委員として、1994年の第2回と95年の第3回、春休みのセミナーの引率をしました。これも、それぞれ末平協さん、三浦八千代さんとの分担です。当時は92年10月のルイジアナ州バトンルーージュでの服部剛丈君の不幸な事件の影響もあってか、94年の方の参加者は20人と少な目でした(ちなみに、服部君のお母さんは愛知大学の卒業生です)。長らく、サウスイースト側で交流の実務責任者を務められたのは、ジェシー・ペリーさんです。毎春のセミナー終了後、各学生の成績表を持って本学にやって来られ、終了したセミナーの総括と翌年のセミナーに向けた打ち合わせをするのが通例となっていました。その後、数年をおいて2000年にも、わたしは引率を担当しています。このときには、ペリーさんは既に退職されていて、サウスイースト側の顔ぶれはかなり替わっていました。

わたしが愛知大学に勤務するようになって以来、大学として一番上り調子の高揚感があったのは創立50周年、1996年の頃だったと思います。1992年の18歳人口205万人により日本の大学全体の定員・進学者が増加した余韻がなお響いている時期でした。その雰囲気

気の中で、1996年11月、愛知大学は創立50周年を迎えることになったのです。

既にそれより前1994年に、サウスイースト・ミズーリ大学からはカーラ・ストループ学長（女性）が本学を訪問されていました。96年当時のデイル・ニチキ学長は、50周年記念式典にはドナルド・ディッカーソン理事長（理事会議長）の出席を求められたということでした（ニチキさんご自身は、後1998年4月に愛大に来られます）。わたしは、国際交流委員会の中のアメリカ委員会委員長として、本業は弁護士だというディッカーソンさんの案内・接待役を務めることとなります。

1998年には、トリード大学との提携の話が持ち上がりました。そもそも、豊橋市がオハイオ州トリード市と姉妹都市協定を結ぶ運びとなり、愛知大学も現地のトリード大学と提携してはどうかという案が出てきたのです。そのために豊橋市の行政と民間から成る代表団が同市を訪問し、協定の署名を交わすということになりました。愛知大学からは、わたしが参加しました。豊橋市は、トリード市との提携のために外務省の仲介を受けたとのことで、署名式には同地域を管轄する天木直人デトロイト総領事も立ち会われました。

トリード大学訪問に当たり、協定案のモデルとして、一番間近に結ばれたハワイ大学との協定を持参しました。ハワイ大学との協定自体、これまでの諸大学との協定の積み重ねを踏まえたものです。トリード大学の国際研究・教育センター長デボラ・ピアスさんからは、よくできている案なので、これをもとに交渉していきたいというお話がありました。このまま順調にことが進んでいくかと思ったのですが、そうはなりません。その少し後にトリード大学で学長の交代があり、新学長が自身の公約も覆して各方面の人事や方針を大転換してしまうという事態になったからです。これで提携交渉も頓挫してしまいます。機運が戻るまでには、その後数年がかかりました。

〈国際コミュニケーション学部の創設へ〉

先に触れた新学部設立の何度かの動きは、わたしには距離のあるものでした。しかし、90年代後半になってからは、教養部の廃止に伴って国際教養学部の性格を持った学部の創設を図るという方向が出されていたので、わたしもそうした理解に立って参加することにしました。

「豊橋新学部構想委員会」は竹中克英さんを委員長として発足することになり、委員としては浜本正文さんやわたしが加わりました。当初、委員会レベルでは単一学科での発足を考えていましたが、大学執行部からの財務上の考慮に基づく要請で夜間主コースを設けることになり、そのために学科を2つに分けるということになりました。やがて、構想段階から設置委員会段階へと進み、委員長には河野真さんが任命されました。「物に触れる教育」を強調する河野さんのもとで、民俗学的な色彩が強くなることとなります。外国語

部門の副委員長には、安藤良太さん、国際教養部門の副委員長にはわたしが就きました。それぞれ、学内他学部への設置案の説明にも手分けして出かけ、次々と出される質問・意見への対応に大わらわでした。

設置委員会では、設置の趣旨等次々と必要になる書類の作成と会議に追まわられることとなります。ただ、慌ただしく開設作業に取り組まなければならない状況下で、学部・学科としてのカリキュラムの構成の議論に十分に時間をかけたとは言えないことが残念で、後々まで尾を引く課題を残すことになりました。

わたしの立脚点からすると、国際教養系のカリキュラムの中で社会科学面が弱いことが大きな問題でした。しかし、教員配置の面から、難しい制約があることも事実です。そうこうするうち、設置審議会の現地審査を迎えることになり、その場でカリキュラムの中に「比較経済システム論」が必要であると、具体的な科目名を挙げた指摘を受けました。また、学内他学部からも、「経営と環境」という科目を設けるべきだとの意見が出されました。前者は設置審の意見ですから、どうあっても実現しなければなりません。設置委員会には参加されていなかった浅尾仁さんをお願いして、担当していただける方を見つけていただきました。また、後者については、経営学部から担当者を出していただけることになりました。

こうして、1998年4月、国際コミュニケーション学部が開設されます。

〈ゼミのテーマの展開〉

わたし自身は社会科学分野の担当で、社会学・社会経済と国際関係が守備範囲です。そこで、ゼミの勉強ではまず19世紀後半から今日まで、世界史の流れをたどって知識を共有し、各ゼミ生にはそこからテーマを見つけて卒業研究を進めてもらうことを考えました。近年は、多少事情が変わってきた面もあるようですが、高校までの学習では現代史の知識が不十分ということがあるので、大学での学びでこれを補おうという意図もあります。大きく19世紀後半からの世界史を、一定の詳しさをもって概説してくれそうな教材（1冊というわけにはいきません）を使いました。そこから各自が関心を引かれる問題をつかんでもらおうという狙いです。その一環として福沢諭吉の『文明論之概略』を、丸山眞男さんの研究・解説を参照しながら読解したこともあります。

しかし、やっているうちに、歴史から入っても、多くのゼミ生の関心は国際関係よりも社会経済に向くことが分かってきました。数年にわたってそういう傾向が続きましたので、それならばと、社会経済の側を表に立てることにしました。そして、そこから視野を国際関係も含めて歴史的に広げてもらうという方針に転換し、ゼミ学習を組み立てるようになりました。

このように愛知大学のこのところの歩みと重ねて記憶をたどってみると、なんだか大学としての進路の問題に振り回され続けてきたようにも思えます。一大学構成員としては、事実その通りかもしれません。同期着任者たちとは、着任後しばらくして、次は将来問題を抱えていない大学に行こうぜと言いついていましたが、じきに日本中の大学がどこもかしこも将来問題だらけという状況になってしまいました。さらには、「大学改革」の嵐も吹き荒れました。わたしたちの世代は、丁度そういう時期に、大学教員になったというわけです。

長い間には教職員も入れ替わり、愛知大学の雰囲気も大分変わりました。しかし、大学としては、研究面でも教育面でも自由な気風はなお保たれていると言えるでしょう。着任後間もなく、この空気は感じ取れました。この自由な気風の中で、学内での活発な学問的交流を通して、研究の活力を上げていきたい。入学してきた学生たちが学問の息吹に触れて、これからの人生の歩みの足場を得られるようにしたい。自由を生かして愛知大学をより活性化していきたい。そう願ってきましたが、その願いをどこまで実現できたかと言えば、心許ないものがあります。

豊橋の街に初めて降り立ったとき、驚いたのは、東海道新幹線が走っている駅だというのに、その駅前空にトビが舞っていたことです。3、4羽が輪を描いていました。うれしい驚きです。その後も5、6年くらいは同じような光景を頻繁に見かけたでしょうか。都市部の空でも時々トビを見かける、そんな時代をまた来たらせたまえ。トキを、イヌワシをとはいいませんから——彼ら／彼女らの姿が見えなくなって以来ずっと、そんな気持ちを抱いています。

退職も間近となった今、わたし個人としては、増えるはずの自由な時間の中で、やり残した自分の研究を進め、まとめをしたいと思っているところです。ようやくスタート地点にたどり着いた感もあります。

日本の大学を取り巻く環境はこれから厳しさを増していくことでしょう。愛知大学が工夫を重ねて大学としての役割を常に果たし、何があろうともさまよえる大学などになることなく、発展し続けていくよう願っています。